

ディズニープリンセスと多様性

竹内 かなえ

(岡本 裕介ゼミ)

この論文は、ディズニープリンセスを通して見えてくる女性の立場や女性像を論じるものである。1937年に初めて白雪姫というプリンセスが誕生して以来、ディズニーは現在に至るまで姿を変え物語を変えながら、その時代を象徴するプリンセスを誕生させてきた。登場するプリンセス像は、時代とともにその多様性を増していくのである。時には「美しく働き者で従順」という初期の頃の規律を超え、時には人種を超え、時代を超えて、ディズニーは「プリンセス」の考え方を常に更新し続けている。

第1章では、まずディズニープリンセスの生みの親、ウォルト・ディズニーと、ディズニーが制作に関わった映画、およびそこに登場するディズニープリンセスの歴史をたどる。第2章では、ジェンダーという視点からディズニープリンセスを論じた先行研究を振り返る。第3章では、先行研究の1つである萩上(2014)の「ディズニーコード」という枠組みを参考に、ディズニー作品に登場するプリンセスに現れる女性観の変遷に触れる。第4章では、以上をもとに、今後のディズニープリンセスの展望を論じる。

第1章 ウォルト・ディズニーと映画

1. ウォルト・ディズニー

まず、ウォルト・ディズニーがどのような生涯を送ったのかを見ておく。以下は能登路雅子の記述(能登路1990:84-122)によっている。ウォルトは1901年12月5日、アメリカ合衆国で生まれる。少年時代は厳格な父親のもとに育った。父親がどんな仕事に就いても成功できずにいる間、ウォルトは新聞配達などを昼夜問わず毎日しており、兄のロイからも「男の子の遊びというのもほとんどしなかった。大人になった今でもキャッチボールがいまだに不得意だ」と言われていたほど

である。しかし、少年時代から絵を描くことやアートに興味をもっていた。ディズニー一家の畑の近くにサンタ・フェ・パシフィック鉄道が走っており、その鉄道の音を聞くのが好きであった。鉄道構内などで新聞やポップコーンなどを売るアルバイトもしていた。青年期は漫画家としての活動を目指し、とりあえず新聞で漫画を描く仕事を請け負ったが、当時新人のウォルトに仕事の依頼は少なく、生活に困るほど苦しかった。それを見かねたロイが知人に頼み、ペスマン＝ルービン・コマシャル・アート・スタジオでの広告デザインの仕事ウォルトに紹介した。ウォルトはここでアブ・アイワークスと出会う。ウォルトが翌年にアート・スタジオから契約を打ち切れ失業すると、2人で新しい創作活動始める計画を立て、漫画家からアニメーターへの転進を決める。1923年にはロイと「ザ・ディズニー・ブラザーズ・カートゥン・スタジオ(DBCS)」を設立する。1926年に「ウォルト・ディズニー・スタジオ」に、1928年に「ウォルト・ディズニー・プロダクションズ」と改名し、その年の11月18日に映画『蒸気船ウィリー』を公開する。この作品でミッキーマウスがデビューし、ディズニー映画の歴史が始まった。

2. ディズニープリンセス映画

1937年に公開された『白雪姫』を皮切りにたくさんプリンセスが誕生した。男女役割分担を反映した初期のプリンセス、白雪姫(『白雪姫』、1937年)、シンデレラ(『シンデレラ』、1950年)、オーロラ(『眠れぬ森の美女』、1959年)、聡明で主体的なプリンセス、アリエル(『リトル・マーメイド』、1989年)、バル(『美女と野獣』、1991年)、多文化・多人種な新しいプリンセス、ジャスミン(『アラジン』、1992年)、ポカホンタス(『ポカホンタス』、1995年)、ムーラン(『ムーラン』、1998年)、ティアナ(『プリンセスと魔法のキス』、2009年)、

現代的価値観と強い女性像のプリンセス、ラプンツェル（『塔の上のラプンツェル』、2010年）、メリダ（『メリダとおそろしの森』、2012年）、王子は二の次のアナとエルサ（『アナと雪の女王』、2013年）、女性の強さや行動力を表すモアナ（『モアナと伝説の海』、2017年）。ディズニープリンセスはその時代の女性像を反映して変化しながら、時代に応じた女性の生き方や男性との関わり方のバリエーションを生み出してきた。

第2章 ディズニープリンセスを論じる 先行研究

若桑みどりの『お姫様とジェンダー——アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』（若桑 2003）では、初期のプリンセスを題材にしており、初期のプリンセスから読み取れるジェンダー観が論じられており、否定的な意見も多く見られる。

荻上チキの『ディズニープリンセスと幸せの法則』（荻上 2014）では、初期のプリンセスと最近のプリンセスを相互に比較しながら、ディズニーによる女性像の更新を論じている。荻上によれば、ディズニーは年代ごとに異なる「ディズニーコード」をもち（「1.0」、「2.0」、「3.0」の3区分）、プリンセスはその年代のディズニーコードに基づいて作り上げられている。ディズニーコードはその時代の女性像や女性の社会的立場を反映している。この論文は荻上の「ディズニーコード」という枠組みに基づいて論じていく。

第3章 プリンセスごとの ディズニーコード

1. ディズニーコード 1.0

荻上（2014）の分類では、ディズニーコード 1.0 は 1930 年～1950 年代に公開された『白雪姫』、『シンデレラ』、『眠れぬ森の美女』の 3 作品であり、ディズニー第 1 黄金期とも呼ばれた時代をまとめてこのように呼んでいる。この 3 作品の共通点はプリンセスたちが「美しく働き者で従順」という女性像を体現しており、古典的なディズニープリンセス作品である。本章では『シンデレラ』を中心に議論を進める。

『シンデレラ』の前半は次のようなあらすじである。昔遠い小さな国に、父と娘が住んでいた。娘の名はシンデレラ。父は彼女のために、2 人の娘を持つ継母を迎えることにした。のちに父親が亡くなると、シンデレラ的美しさを妬んだ継母は、屋敷の仕事をすべて押し付けるようになる。彼女は家のネズミや犬を友だちにして、お城の華やかな生活を夢見ながら、働きずくめの毎日を送っていた。ある日、お城で王子様の帰国を祝う舞踏会が開かれることになり、シンデレラは友だちや妖精の力を借りて、一晩だけ美しい格好に変身し、舞踏会へ出かけた。

1 つ前の作品『白雪姫』に登場する白雪姫に比べて活発ではあるが、『シンデレラ』は基本的なプリンセス像を崩さない。「シンデレラストーリー」という言葉もあるように、物語の中でヒロインの階級が上がるという特徴をもつ。ディズニープリンセスは自由恋愛の末に結ばれるケースが多く、この考えは今も変わっていない。白雪姫が王子様を待ち続けるのに対し、シンデレラは自分から舞踏会に行くことを望み、実際に舞踏会へ足を運ぶ積極的な一面を見せる。ただし、王子とは気付かずにそのまま帰ってしまう。王子様は迎えに行くものでなく、あくまで迎えに来てもらうものである。この考え方の中には、女性は「美しく働き者で従順」であれば報われるというメッセージが含まれている。自由恋愛ではあったものの受動的でかなり保守的な女性像である。この女性像は物語の中だけの話ではなく、公開された 1950 年代に求められた理想的な女性像にかなり近い。

1950 年代のテレビ・雑誌・通販カタログ等のメディアの中での女性たちは、電化された小ざれいな台所でかいがいしく働く専業主婦、子育てに熱心な母親、そしていつも美しくフェミニンな装いでサラリーマンの夫に寄り添う妻として描かれた。1950 年代は、規範としての家庭性（ドメスティシティ）がアメリカ人女性に強く求められ、メディアを通して広く流布された時代であった（土屋 2010：237）。

シンデレラもこういった女性の一人であった。その時代の女性のような生活を送っていたが、シンデレラは「シンデレラストーリー」そのままに、

見事に上流階級の女性へと変わった。シンデレラは舞踏会で一緒に踊った男性が王子だとは知らずに、後になってから王子だと知る。つまり、王子だから好きになったわけではなく、好きになった男性がたまたま王子様であっただけなので、自由恋愛は成立していることになる。自由恋愛を楽しみながらも受動的で保守的という理想の女性像をウォルトは映画を通じて伝えようとしていた。

2. ディズニーコード 2.0

荻上(2014)は、ディズニー・ネッサンスと呼ばれる第2次黄金期の作品の中で1989年～1992年に公開された『リトル・マーメイド』、『美女と野獣』、『アラジン』の3作品をディズニーコード2.0に含めている。『眠れぬ森の美女』から30年ぶりに公開された『リトル・マーメイド』から『アラジン』までの作品は、どのプリンセスも新しい特徴をもつ。ディズニーコード2.0の作品群は、それがなければ今後につながるプリンセスが誕生しなかったのではと言えるほど重要である。この3作品の中から『美女と野獣』と『アラジン』を中心に議論を進める。

(1) 『美女と野獣』

まず『美女と野獣』の冒頭のあらすじを示す。昔遠い国の城に、わがままな王子が住んでいた。ある時王子は、一夜の宿を乞いに来た老婆を追い返す。しかし、実はその老婆の正体は魔女だった。罰として王子は野獣に、召し使いたちは家財の道具に変えられてしまう。魔法を解くには、王子が愛することを学び、誰かを愛されなければならない。その城の近くの街に、ベルという美しい娘が暮らしていた。ある日、ベルの父モーリスは城に迷い込み、野獣に捕えられてしまう。ベルは父の身代わりとなり、一生城で暮らすことを約束してしまう。

ベルは、古典的なプリンセスを否定するような「アンチ一目ぼれ」プリンセスである。それまでのプリンセスは、男性と第一印象から惹かれあい、そして結ばれるというケースが多く見られた。しかし、『美女と野獣』では、プリンセスは美女だったが、王子は姿を野獣に変えられていた。しかも、彼はわがままであり、2人の第一印象は最

悪で、とうてい結ばれるには至りそうにない出会い方であった。この映画では「お互いの価値観の一致」がテーマとなる。ベルは本が好きで街の人たちから理解されず「変わり者のベル」と呼ばれていた。野獣は他人の気持ちも分からずわがまま、それでいて臆病でネガティブである。第一印象ではまったく惹かれることもなく、お互いに警戒している様子がかがえる。野獣は召し使いたちに促されてベルを食事に誘うも、彼女は断り、2人の関係は悪化しているようにも思えた。ところが、ベルが本を読むのが好きだと知って図書室をプレゼントしたことから2人の距離は縮まることになる。ベルは食事のマナーがなっていない野獣に対し最初は呆れていたものの、怒ることなく新しいマナーを考え野獣に教える。2人はお互いを知ることによって時間をかけて愛を育んでいく。こうして、これまでとは違う全く新しい方法で結ばれる。見た目には捕らわれず、時間をかけて相手を知っていくのが大切であると伝えているとともに、プリンセスだけでなく女性像の更新も同時に行っている。最終的に野獣はもとの姿に戻ることができる。これは内面が外見に表れるという言葉をそのまま表しているに違いない。

(2) 『アラジン』

『アラジン』のあらすじは以下の通りである。昔遠い砂漠の国アグラバーに、願いを叶える魔法のランプが眠っていた。国の支配を企む大臣のジャファーは、ランプの隠し場所に入ることができるのが、貧しいけれど気のいい若者アラジンだけであることを知る。アグラバーの王女ジャスミンは、父から三日以内に結婚するように迫られていた。彼女は規制ばかりの王宮を抜け出すと、市場でトラブルに見舞われる。そんなジャスミンを助け、捕えられたアラジンは、ジャファーの差し金でランプを取りに行くことになる。偶然魔人を呼び出し、願いを叶える権利を得ることになる。

ジャスミンは、ディズニープリンセス初の白人以外のプリンセスである。ただし、アグラバーは架空の国であるため、どこの国なのか、どういう人種なのかは明らかにされていない。ディズニー映画のプリンセスは白人が多いなか、白人以外の作品が誕生することは、プリンセス像の大きな更

新であると言っているだろう。ジャスミンはディズニープリンセスで唯一のわき役のプリンセスであるが、人気は高い。父親に結婚を迫られるが、王子としか結婚できず、愛のない結婚を無理強いされることを嫌い、法律が間違っていると主張する。強い自立心と意志を持ち、規律ばかりの生活の中で自由な人生に憧れを持っている。同じディズニーコード2.0の『美女と野獣』のベルに比べて活発である一方、『リトル・マーメイド』のアリエルほど天真爛漫ではない。この作品までのプリンセスは、女性が上流階級に上がることで成り立つ物語が多かった。つまり、プリンセスになれば幸せになれるということが描かれてきた。しかし、『アラジン』ではプリンセス自身がプリンセスであることに対してそこまで幸福感を感じていない。逆に男性側のアラジンが上流階級になろうと奮闘する姿を描いている物語である。一方、女性側のジャスミンには明確な目的があり、挑発的に男性に意見を言う。これまでの作品との大きな違いは「抑圧からの解放」である。また、アラジンは貧困からの自由を求め、ジャスミンは結婚や王宮の昔からの決めごとを「誤ったもの」だとし、そこからの自由を求める。つまり、「自由の重要性」を描いていると言い換えることもできる。2人が求める自由の形は違うのだが、相手が自分の求める自由を持っているとわかったとき、2人の関係は恋に発展する。ジャスミンの心を動かしたのは、豊かさではなく自由への誘いである。この自由の重要性はディズニーコード2.0に含まれている。ディズニーコード1.0のような「美しく働き者で従順」はもう古く、新しい世界へ更新しようという狙いもある。また、アラジンとジャスミンが結ばれることにより、「高貴なもの同士でなければ結婚してはならない」というルールも崩れている。

3. ディズニーコード3.0

(1) 『アナと雪の女王』

『アナと雪の女王』は2014年に公開され、世界中で幅広い世代から支持された。日本では映画だけでなく劇中歌の「Let It Go～ありのまままで～」が大ヒットした。荻上(2014)は『アナと雪の女王』をディズニーコード3.0として、これ以前の

ものと区別している。ディズニーコード3.0でもプリンセスは恋よりも自由を望む。ここで登場するプリンセスが従来のプリンセス像を大幅に更新しただけでなく、物語も王道ロマンス映画を超え出ることになる。それが幅広い世代から支持された理由とは何なのか。

『アナと雪の女王』は次のような物語である。昔々、アレンデルという王国にエルサとアナという姉妹のプリンセスがいた。姉のエルサは、触れたものを凍らせる不思議な力を持っていた。姉妹で仲良く遊んでいたときのこと、エルサは誤って氷の魔法をアナにかけてしまい、アナは意識を失ってしまう。国王はアナを救うべく辺境のトロールに助けを求め、アナは一命をとりとめたが、エルサの危険な魔法の力をコントロールしなければならぬと警告される。この事件以来、城の門はすべて閉ざされ、エルサは部屋に閉じこもるようになる。それから長い月日がたち、再び門が開放される日が来た。エルサの戴冠式を行うためである。久しぶりに外の世界に触れたアナは大はしゃぎ、偶然出会ったハンス王子と意気投合し、その日のうちに婚約してしまう。しかしエルサは2人の結婚に反対。アナと口論になり、興奮したエルサは城を飛び出し、雪山にこもってしまう。アナは凍った王国を元に戻し、エルサを連れ戻すべく、山男クリストフ、雪だるまのオラフとともに、エルサのいる雪山に向かう。

(2) 2人のプリンセスの恋愛観

従来のディズニープリンセス映画では、1作品にプリンセスは1人というのが当たり前であったが、『アナと雪の女王』ではタイトルのとおり、アナだけでなく雪の女王・エルサにも焦点が当てられている。2人は姉妹であるにも関わらず、正反対のプリンセス像を反映している。アナの方は、出会ったその日に意気投合し、男性と結婚を約束してしまう、ディズニーコード1.0で当てはまるようなプリンセス像を持つ。これに対し、エルサは「初めて会う人と結婚なんて」とアナに言うような現実的な恋愛観を持つ。1つの作品の中でそれまでの作品を肯定し、かつ否定もする。それまでのプリンセスの恋愛観がぶつかっている。しかし、アナは単に待っているだけでなく、自分から

行動できるような活発な一面も併せ持つ。物語の後半で、アナは結婚の約束をしたハンス王子に裏切られてしまう。結ばれたのは、ともに苦難を乗り越えたクリストフであった。アナにディズニークード1.0をそのまま当てはめるとハンス王子と結ばれることになるが、結果は異なり、苦難とともに過ごした人と結ばれる。第一印象で決めない恋愛観に更新されている。一方で誰とも結ばれないのがエルサである。2人のプリンセスの価値観がはっきりと分かれていることが分かる。

(3) 「Let It Go～ありのままで～」について

—抑圧からの解放

日本では映画の挿入歌「Let It Go～ありのままで～」(以下、「Let It Go」)が映画とともに大ヒットし、子どもだけでなく大人の女性にも受け入れられた。しかし、エルサはありのままにいられたのか。結論から言えば、エルサは心を入れ替えたように感じるのではないだろうか。荻上は「Let It Go だけでは幸せになれない」と言っている(荻上 2014: 46)。

多くの人が日本語版のサビの「ありのままの～」と歌っているエルサの姿を見て、「どんな自分も受け入れて生きていい」と捉えてはいないだろうか。しかし、もとの英語版の「Let It Go」では、「もういっそ自由に生きよう」という解放感の意味合いが強い。ありのままの姿を受け入れることではなく、もともと抑圧されていた力が解放されたという気持ちの表れである。映画の中でのエルサは、当初暗い表情が多く見られたが、「Let It Go」で抑えていたものを解放するエルサの姿は表情が豊かで活発である。自分の地位(女王)を捨ててここで自由に生きていくのだというエネルギッシュな姿に変わる。なぜ日本版と英語版ではこんなに意味が違うのだろうか。エルサは生まれつき持っていた能力が引き起こした事故をきっかけに、両親や姉妹から隔離され、人にはその能力のことを知られないようにしなくてはならなくなった。本人の意志とは関係なく、その抑圧に耐えなくてはならない。しかし、その姿を周りの人に知られてしまい、それを隠す必要がなくなった。そこで登場するのが挿入歌「Let It Go」である。そこで「ありのままの自分になるの」と歌う姿を見て、日本

の大人の女性は胸を打たれたのではないだろうか。現代の女性は昔に比べると活躍の場が増えたものの、いまだに抑圧される場面は多くある。エルサの姿は、多くの女性の心の支えとなり、憧れや理想となった。それまで恋愛中心であったディズニープリンセス映画から、大きく変化した作品なのである。

ここまで『アナと雪の女王』の2人のプリンセスが、今までとは違う形のプリンセスだと述べてきた。アナはとても活発でおっちょこちょい、そして寝起きの姿は髪がボサボサで、プリンセスは「美しく」あるべきだという概念を覆すような、現実にいそうな女の子である。これに対しエルサは、抑圧からの解放を体現している。ここではさらに、エルサがヴィラン(悪役)であったかもしれないということに触れたい。

エルサがアナと言い合いになり感情的になり過ぎた結果、隠し続けてきた能力を使ってしまう。王国は氷の世界になり、直せるのはエルサしかないと考えたアナは、エルサを救いに行くと言って王国を出る。しかし、エルサはアナの説得に応じず、むしろ攻撃的な態度を取ってしまう。今までならエルサはヴィランにもなれる。Linkcoln Square Productions (2014)によると、『アナと雪の女王』の制作チームは今のような姿ではなく、もっと恐ろしい雰囲気をもった悪の女王を生み出そうとしていた、という。しかし彼らは、生まれ持った能力だけで悪役なのか、こんなに孤独だったらどんな気持ちになるだろうか、と考えてみた。エルサは過去のすべてを捨てなければならなかったのである。そこから「Let It Go」が誕生した。「Let It Go」はいわばエルサの変身ソングである。エルサが自分の能力を生まれて初めて外で使うことで本当の自分を知り、自信を取り戻していく。本当の自分を探して戦う女性の1人だった。エルサは悪の根源ではなく、少し誤解されやすい女性なだけだと気づいたのだ。アップにしていた髪を下すシーンにも意味があり、本当の自分に戻る解放感を、髪をおろすことで表している。

エルサとアナともにプリンセスであり、英雄的な活躍をする女性である。ところがみんなが現実的になりすぎて、ディズニーの本当のおとぎ話が受け入れられなくなってきていた。過去のプリン

セスは王子様が現れて幸せにしてくれるのを待っている。しかし、現実はまだそうではない。ここから制作チームは、ディズニーの古典的なプリンセス映画ではなく、新しい世界、新しいプリンセスを誕生させることに成功した。アンチディズニープリンセスともとれる作品である。現代の女性も王子様が幸せにしてくれるような恋愛はあまり求めていないのかもしれない。夢から覚めるような作品である。アナがハンス王子に冷めたように。

4. 新しいプリンセスの誕生

(1) 『モアナと伝説の海』

2017年に日本で公開された新作『モアナと伝説の海』のプリンセス・モアナは、過去のプリンセスたちとは違う一面を持つ。ここでは『モアナと伝説の海』を中心に議論を進めていく。

かつて世界を生んだ命の女神テフィティの心が、伝説の英雄と言われた Maui によって盗まれ、世界に闇が生まれた。それから1000年にわたり、モアナの生まれ育った島、モトウヌイでは、外洋に出ることが禁じられていた。そんなある時、島で作物や魚たちに異変が発生。海の不思議な力に選ばれた少女モアナは、いまでもどこかで生きている Maui を探し出し、テフィティの心を元あった場所に戻すことができれば世界を救えるを知り、父親の反対を押し切り大海原に旅立つ。

モアナはディズニー史上初のポリネシア系のプリンセスで、この作品はプリンセス像の多様性が増した作品の1つである。名前の「モアナ」はハワイ語で「海」、「太平洋」を意味する。1989年に公開された『リトル・マーメイド』以来となる海を舞台にした物語である。また監督は『リトル・マーメイド』、『アラジン』を手掛けたジョン・マスカーとロン・クレメンツが務める。新しいディズニープリンセスを生み出してきた2人が『塔の上のラプンツェル』、『アナと雪の女王』を経て、『モアナと伝説の海』でプリンセス像を更新した。

特に注目すべき点は、そもそも『モアナと伝説の海』にはロマンスがないという点である。ディズニーコード1.0や2.0に含まれる作品では、男性と結ばれる結末が多く、逆に家族の関係は破綻していることが多かった。女性の幸せは男性と結

ばれることで初めて実現できると言わんばかりであったが、それ以降の作品では、女性の自立心・探求心・勇敢さが描かれることも多くなってきている。モアナはまさに自立心・探求心・勇敢さを併せ持ち、情熱的に夢を追う、負けず嫌いなプリンセスである。

ディズニーの物語の流れからすると、モアナはプリンセスであるが、彼女自身はプリンセスではなく〈村長（むらおさ）〉であるという気持ちが強い。劇中で伝説の男・Mauiに「お姫様」と呼ばれてからかわれるが「お姫様なんかじゃない、私は村長よ」と言っている。過去のプリンセスたちは、男性に助けられる場面も多かったが、『モアナと伝説の海』では、仮に男性に助けってもらうことがあったとしてもすべてを任せることは決してしない。あくまで自分の力がどこまで通用するのか試しているように思う。男性と結ばれることが幸せに直結しているとは限らない。現代の女性は、恋愛で幸せを築くことよりも、自分の力で道を切り拓いていく生き方をしたいと思う人が少なくはない。プリンセス像を更新したモアナに感化される女性も多いだろう。これまでのディズニープリンセスの中でも最も活発なモアナは新しいディズニープリンセスの象徴であるといえる。

(2) 『アナと雪の女王』と『モアナと伝説の海』の家族の形

Erik Weeks (2012) はディズニー・アニメと宮崎駿アニメのヒロインを比較し、両者の違いの1つが家族であると論じている。宮崎作品に登場する親は、いてもいなくても子どもにいい影響を与えているのに対し、ディズニープリンセス映画では、両親がいなかったり、両親が何らかの問題の種であったりする。こうした、「悪い親」に、プリンセスたちは反旗を翻す。ディズニー・アニメではなぜ家族の機能不全が描かれるのであろうか。おそらくそれは、よい家族の不在が女性の不幸の物語の端緒になっているからだろう。ロマンスは、家族の不在という不幸を埋め合わせるものとしてあり、プリンセスたちはロマンスを通して幸福を獲得する。これが『モアナと伝説の海』以前の物語では定番だった。ここで『アナと雪の女王』を取り上げて、両者を比較してみよう。

『アナと雪の女王』と『モアナと伝説の海』では異なる家族の形が描かれている。『アナと雪の女王』でアナとエルサは幼い頃に両親を亡くし、姉妹2人だけ残されてしまったが、エルサは特別な力を持つせいで部屋に閉じ籠ってしまう。この時の姉妹の関係は破綻している。一方『モアナと伝説の海』では両親が途中で亡くなったりはしない。中盤でモアナの祖母が亡くなってしまうが、エイとなった祖母の魂が、ピンチになったモアナの心の支えとなる。父親と口論になってもその関係は破綻しない。『アナと雪の女王』と『モアナと伝説の海』の違いは、家族の形である。『アナと雪の女王』では、エンディングにかけてお互いの大切さを再確認し、再び関係を修復していく姿が描かれ、いかに家族が大切であるかという視点が示されているが、『モアナと伝説の海』では家族の形は最初から存在していた。家族という存在がモアナにとって当たり前であり、なくてはならないものとして最初から描かれている。物語の中で家族を構築していく『アナと雪の女王』と家族の姿が日常である『モアナと伝説の海』とは、同じ家族をテーマにしても全く異なっている。

第4章 これからのプリンセス

1937年に『白雪姫』が公開されてから、たくさんのディズニープリンセスたちが世の中の女の子や大人の女性たちの憧れであり続けたことは間違いない。時代が移り変わるにつれ、プリンセスたちもその時代に求められるような女性として描かれている。1950年に誕生したシンデレラは50年の時を経てさらに新しい形で私たちの前に現れた。2007年にオリジナルビデオ作品として公開された『シンデレラII』では、シンデレラは「シンデレラストーリー」を成し遂げたのち、王子と結婚したが、あまりにも多い王宮のしきたりに慣れず、疑問ばかり抱くようになる。王国は『シンデレラ』で描かれているように、古い伝統を守る国という設定であった。しかし、「王子はありのままの私を愛しているから結婚した」と考え、「規則に縛られるのはもうやめるわ」と宣言して、教育係から「しきたりに反する」と言われるようなことをあえて行なうことで、しきたりを変えてい

く。シンデレラは「新しいことに挑戦してみない？」と言いながらすべてを変えていくのである。最後には国王に「新しい伝統が必要だ」と言わせるほど大胆な行動を起こし、典型的なプリンセスの象徴であると言われたシンデレラ自身が新しいプリンセス像を見せつけたのである。「美しく働き者で従順」というイメージを自ら変えていった。『シンデレラII』の中でシンデレラは「規則を作る前にはほかの規則があったはず」とも言っている。すべてを否定することなく、あるべきものは守り、壊すのではなく新しく作ればいい。この考え方は、今後のディズニー映画の新しい「コード」になっていくのではないだろうか。

また、ディズニー映画でロマンスと家族の両方が同時に描かれることがなかったことについては、すでに述べたが、2018年3月に公開される映画『リメンバー・ミー』、同時公開される『アナと雪の女王／家族の思い出』の両作品とも「家族」が大きなテーマとなっているという。常に新しい作品を生み出し続けるディズニー映画の中でも、より新しいコードを体現した作品になることは間違いないと思う。典型的な家族の形が守られつつ、ロマンスも生まれるような作品が今後生まれることを期待したい。

おわりに

以上のように、次第に多様性を増すディズニープリンセス像を見てきたが、私自身がディズニープリンセス映画に憧れを抱いている1人だ。ディズニープリンセスは、いつの時代も変わらず私たちに「諦めない心」、「信じれば叶う」ことを教えてくれる。時代や性格や境遇や物語が違って、またプリンセス像がどれだけ更新されても、「諦めない心」と「信じれば叶う」ことだけはすべての作品に共通していることである。両親がいなくても、王子様が現れなくても、私たちは私たちの持っている力で物事をいい方向へと導ける。いつの時代も少しの工夫と苦難に立ち向かっていける勇気があれば大丈夫だと思わせてくれる。そして、悩める全ての女性に寄り添ってくれる。そんな魔法がディズニープリンセス映画にかけられているに違いない。

参考文献

- Linkcoln Square Productions, 2014, 「アナと雪の女王のすべて——新しい冒険」(2017年9月10日, Dlife 放送).
- 土屋由香, 2010, 「冷戦時代の日米関係とジェンダー」, 有賀夏紀・小檜山ルイ(編), 『アメリカ・ジェンダー史研究入門』青木書店, 273-290.
- 荻上チキ, 2014, 『ディズニープリンセスと幸せの法則』(星海社新書)星海社.
- 能登路雅子, 1990, 『ディズニーランドという聖地』(岩波新書)岩波書店.
- 若桑みどり, 2003, 『お姫様とジェンダー——アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』(ちくま新書)筑摩書房.
- Weeks, Erik, Minori Yakura and Hiroko Gohara/Galileo (Eds.), 2012, 「ディズニーと宮崎アニメ——ヒロインから見た文化論」. (2017年12月12日取得, <https://wired.jp/2012/08/16/disney-vs-miyazaki/>)